

六

薄い夕もやが、辛子菜畑の花の上にたゆたう景色を突き抜けて、昨日ブツダガヤに向かった道を逆に二時間約五十里疾駆。パトナ市のホテル・リパブリックに着く。巡礼僧はみなペコペコ腹で遅い夕食を待っていたが、私は六時を過ぎると食事をしない習慣なので一浴して少しメモ。そのメモにブツダガヤ周辺の物乞の群は大変なものだ、ステッキで追っばらうにかぎると書かれた本など、いくつも見えた覚えがあるのに、今朝見たあそこには絵葉書とか数珠とかを売りせがむ少年や老婆だけで、物乞は全く見なかった、と書き入れてある。

これはあとで聞いた話だが、十年ほど前からインド政府は、仏蹟の整理保存とその周辺の浄化に大変力を入れているということ、これもその有り難い成果であろうと思うが、その物乞生活の人々は今どういうことをしているのかな——などと心配にもなる。

朝の早いのはインドでも心地よい。ホテルの軽い朝食後、見なれたマンゴウの大きい並木道をパトナ空港へ急ぐ。乗った飛行機は一昨日パトナへ来る時の機でスチュワーデスも同じ、サライの袖をかかかって親しげに挨拶してくれた。

飛翔五十分でベナレス空港に着く。ベナレス市のまん中にあるホテル・ド・パリという広い芝生の庭園を持った旅館に休息。ここで初めて休息という言葉にふさわしい休息をして、親愛なる——少々ハイカラに気どって——わが日本の師、友、家族などに手紙を書く。しかし、その絵葉書類のお粗末至極なものに比して値段の高いには驚いた。空港で買った地図などもそうだが、えらく印刷物の高価なお国である。

もらった人は感謝して下さいヨ。呵々。

漫々デーとなると、何もかものおんびりするのがこちらの美風で？ 昼食の終わったのが二時近く。そこで出発、顔の下半分をひげで包んだような堂々たる運転手君操縦の車で、世尊が正覚後初めて説法の所、初転法輪寺に向かう。

燦々として降る日光の暑いこと。これがクリスマス後の陽気かと思ふようである。

ベナレスから北へ四里というから大した距離ではないが、初転法輪寺のあるサルナートの町は、郊外の屋敷町といった静かな感じ。途中左方の小さな丘の上に、八角の古い小塔が見える。何か由緒のあるものらしいが、ガイド君まで知らないのだから仕方がない。一行の数人はその丘に登って塔内の写真を撮って来たが、その話によると眺望のよいこと、少し離れたサルナート仏蹟が絵のように見えたという。惜しかったが不精者への罰。

初転法輪寺のすぐ手前にサルナートの博物館がある。大菩提会の創始者ダルマ・パーラ氏の建てたものとのこと。往来を隔てた反対側で切符を売っている。インド博物館で金を払うのはこれが初めてであるが、それがまた奇妙、子供の切符二枚が大人の入場券。子供は大人の半額というのが日本の習慣なのでハテナと思う。

この博物館のほどよい広さ、すがすがしさ。芝生の庭に咲きほこっている日本の菊、インドは公衆設備のところでは必ずといってよいほどよく日本の菊を見る。大変な親日の自然な意思表示であろう。この博物館の収蔵は、のちのニューデリーと合わせて実にすばらしかった。この正面ホール中央に置かれたアシヨカ石柱の頭部獅子像こそは、いまこの国の紋章であり公式のもの一切から紙幣その他にも描き入れられているものである。紀元前三世紀も前の製作が、顔の映るように光っていて、とても二千年以上の星霜を経たものとは考えられない。

その傍にあった欄楯の雄渾で、円形の中に収めた動物植物などの文様図案のみごとき、左右に広がる名宝の列品、ほとんどが石刻ものであることも国土による条件なのである。釈迦三像の等身に近いもの、菩薩、ことに女菩薩像の可憐なもの、土地柄もあって世尊が五比丘に説法の刻石などもあってとうとうこの博物館には二日通ってノートを取るといふ仕儀。今でもあの左右の廻廊に置かれた建築部分材の仏伝レリーフの美しさ、唐草文の調和など時々思い出しては眼福を感謝している。

(つづく)